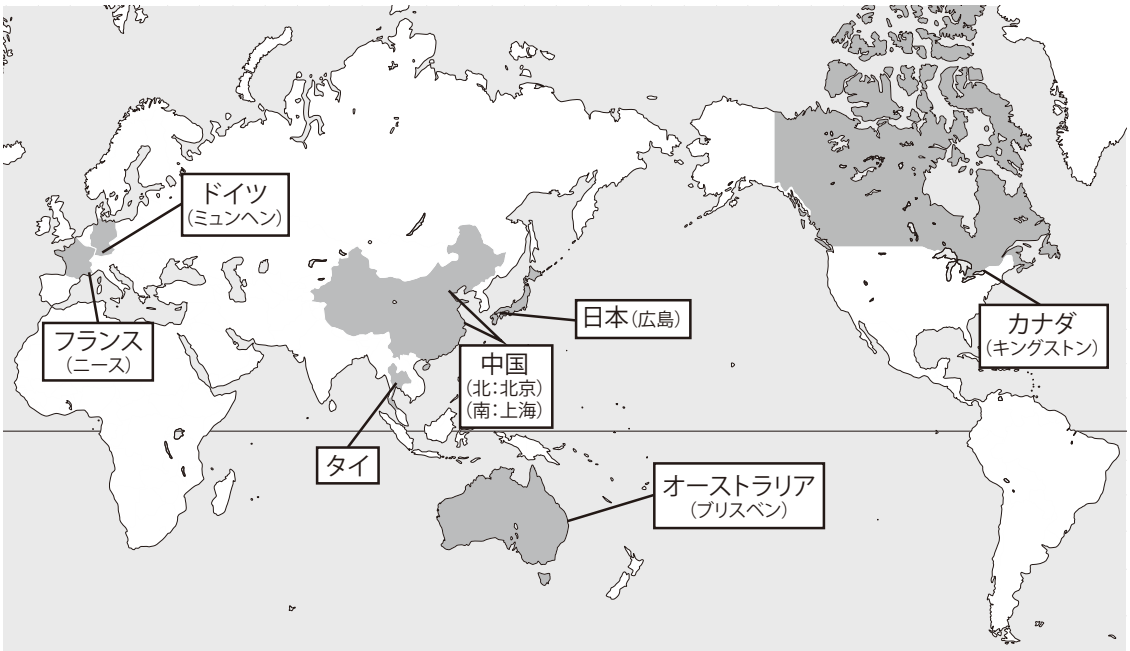
一度は行ってほしい・体験してほしい世界の○○



ドイツのオクトーバーフェスト（Oktoberfest）

国際コミュニケーション学部
樋口　恵

みなさんは「ドイツ」という国にどのようなイメージをお持ちでしょうか？クラシック音楽、車、サッカー、美しい街並みとお城、ナチスドイツ・・・。様々なイメージのなかでも「ドイツ」と聞いてまず「ビール」を思い浮かべる人は多いのではないでしょうか？

ドイツ南部の街ミュンヘンでは、毎年9月末から10月にかけて「オクトーバーフェスト」という世界最大のビール祭りが開催されます。約二週間の開催期間中、ドイツ国内だけでなく世界各国から約六百万人の人々がこのお祭りを訪れ、実に七百万リットル以上のビールが消費されます。オクトーバーフェストはミュンヘンのテレージエンヴィーゼ（Theresienwiese）で催されるため、地元の人たちはこのお祭りを「芝生（d'Wiesn）」と呼んでいます。会場には体育館ほどもある巨大なテントが数十も設営され、その中では人々が「マースクルーク（Maßkrug）」と呼ばれる一リットルジョッキに入ったビールを片手に、ブレッツェル（Brezel）や白ソーセージ（Weißwurst）、鳥の丸焼き（Hendl）などの伝統的な食べ物をつまみながら談笑しています。また、会場にはジェットコー

会場内の移動遊園地

スターや観覧車をはじめとした数々のアトラクションを備えた移動遊園地も存在するため、大人だけではなく、子供たちも一緒にこのお祭りを楽しむことができます。（ビールを飲みすぎた後のジェットコースターには要注意です。）

オクトーバーフェストの起源は、1810年に遡ります。1810年10月にバイエルン王国（現在のミュンヘンが位置するドイツ南部にあった王国）の皇太子ルートヴィヒとテレーゼの結婚パーティーが行われましたが、そのパーティーでは盛大なパレードとともに多くの参列者たちがビールで乾杯して２人を祝福しました。これがオクトーバーフェストの発祥だと言われており、そのため当時のお祭りの開催地であった「テレージエンヴィーゼ」（テレーゼ芝生）は、現在でもオクトーバーフェストの会場としてその伝統を守り続けています。しかし、オクトーバーフェストがビール祭りとして定着し、そこで大量のビールが消費されるようになったのには、もうひとつの理由があります。

バイエルン王国には、オクトーバーフェスト以前にも既にビール祭りが存在しましたが、それらもやはり９月末から10月にかけて開催されていました。バイエルンでは1589年以来、ビールの醸造は冬の間（9月29日から4月23日）のみ、法律で許可されていました。この法律が成立した背景には、ビールの冷却保存の技術が未発達だったからという衛生上の理由、そして、しばしば夏にビールの醸造所で火災が起きていたためその火災を防ぐため、という安全上の理由がありました。そこで、当時は夏まで長期保存が可能な日持ちのするアルコール度数の高いビール「メルツェンビール」が醸造されていました。9月の終わりから再び新しいビールが醸造されるので、9月末から10月にかけて、人々は前年の残りのビールを大量に飲んで消費するようになりました。「新しいビールの醸造に向けて、古い年のビールを飲んで片づける」。これがオクトーバーフェストの本来の意味だったのです。

オクトーバーフェストでは、多くの人々が特別な衣装、バイエルンの民族衣装を身に着けています。男性は「Lederhose」という皮のズボン、女性は「Dirndl」と呼ばれる襟ぐりの深いブラウスとエプロンを身につけます。「Dirndl」はエプロンの腰の部分でリボンを結ぶのですが、このリボンの位置には意味があります。リボンを左前で結ぶと未婚、右前だと既婚もしくは婚約中、そしてリボンを後ろで結んだ女性は未亡人またはウェイトレスなのだそうです。

Lederhose と Dirndl

「Lederhose」や「Dirndl」はオクトーバーフェストだけでなく、お祭りの時など、ちょっと特別な日にバイエルンの人々が身に着ける一種の晴れ着のようなものです。日本の浴衣や着物に近い感覚かもしれませんね。

今回、コロナ禍が終了したら、ぜひ学生に体験して欲しいことを書いてほしいという依頼でこの文章を書いていますが、昔から反面教師、不良教師でしかない私は、碌な経験をしていないので、本当は書くことがありません。それに加えて、今回は名古屋語研からの依頼と言うことで、いつも豊橋語研の『LAN･CAFÉ だより』に書いている私としては、多少のアウェイ感もあり、さらに事を複雑にしています。

ところで、私とフランスとのかかわりは、最初はお勉強などというご立派なものではなく、バックパックを背負ってのフランス旅行でありました。フランス青少年スポーツ省のフランスの青年たちとキャンプを共にするというプログラムに参加して、2週間を過ごしました。

2週間でやったことは、カヌー、ロードバイク、はたまたウインドサーフィンと恐ろしく体力のいることばかりで、少しも文化的なことではありませんでしたが、最初のフランス体験がいわゆるヴァカンスであったというのは特記すべきことで、そうしたことが不可能になりつつある（もうすぐ高齢者です）今となっては、もし若かったらという仮定で、是非とも挑戦したいことがあります。

それは何かと言うと、フランスの田舎を歩きたいというものです。留学生であったころ、南仏ニースの町に何年間か住んでいたのですが、宿舎の窓から Mont Chauve「禿山」という丘が見えていました。実はこの丘を越えてアルプスにつながる道があり、それは GR5（Sentier de grande randonnée 5「大ランドネ5号道」、これは同時に Sentier européen E2「ヨーロッパ2号道」でもあります）としてよく知られたものとなっています。ちなみに、GR1 はパリ郊外を一周するものであり、GR65 は世界遺産の「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」のフランス国内部分となっています。GR はアパラチアン・トレイルにその歴史では及ばないものの、ヴァカンス法の施行（1936 年）以降雨後の筍のように増え、欠番はあるものの 800 番までが整備されています。これらは､フランス･ランドネ連盟（FFRandonnée）によって管理、運営されています。

話を GR5 に戻すと、全行程 2200km の大まかな道筋は次のようになります。オランダ、ベルギーを通過したのちルクセンブルグからフランスに入り、ヴォージュの山中を抜けてスイスへ、そして最後はスイスとの国境のレマン湖から地中海の海辺のニースまです。

最後の行程についてみてゆくと、この道は La Grande Traversée des Alpes「アルプス大横断」とも呼ばれていて、手元のガイドブックによれば 37 日ほどの日程になっています。そして 4 シーズン、つまり 4 か年かけて踏破するのが良いとされています。

宿泊は、Hôtel「ホテル」、Auberge「旅館」、Gîte「民宿」や Chalet「山荘」、Refuge「避難小屋」と呼ばれる Cabane de montagne「山小屋」のほ